「『見なさい』との招き」ヨハネ1:35-42

1:35 その翌日、ヨハネはまたふたりの弟子たちと一緒に立っていたが、
1:36 イエスが歩いておられるのに目をとめて言った、「見よ、神の小羊」。
1:37 そのふたりの弟子は、ヨハネがそう言うのを聞いて、イエスについて行った。
1:38 イエスはふり向き、彼らがついてくるのを見て言われた、「何か願いがあるのか」。彼らは言った、「ラビ（訳して言えば、先生）どこにおとまりなのですか」。
1:39 イエスは彼らに言われた、「きてごらんなさい。そうしたらわかるだろう」。そこで彼らはついて行って、イエスの泊まっておられる所を見た。そして、その日はイエスのところに泊まった。時は午後四時ごろであった。
1:40 ヨハネから聞いて、イエスについて行ったふたりのうちのひとりは、シモン・ペテロの兄弟アンデレであった。
1:41 彼はまず自分の兄弟シモンに出会って言った、「わたしたちはメシヤ（訳せば、キリスト）にいま出会った」。
1:42 そしてシモンをイエスのもとにつれてきた。イエスは彼に目をとめて言われた、「あなたはヨハネの子シモンである。あなたをケパ（訳せば、ペテロ）と呼ぶことにする」。

●序論
この１章で三回、冒頭「その翌日」と記す箇所があります。
日を区切り、バプテスマのヨハネに集められていた注目が、ヨハネ自身の証言によって、イエス・キリストに向けられていく最初の動きがわかります。
そして今日、このヨハネの福音書の中でのイエスさまの最初の言葉があります。
　「何か願いがあるのか」。
　「きてごらんなさい。そうしたらわかるだろう」。

今日、見ている言葉は、決して劇的でもない。気負いもない。日常的、街角での会話…のようなふんわりしたものです。でもそこから始まるイエスさまと弟子となる人たちの物語があります。
　だから、今日、わたしたちもまた特別な事件があった…からではなく、この日常に、イエスさまとの出会いや導きを聞くことができる。イエスさまの恵みは、わたしの日常を覆うんだ。…そう期待できることを覚えていただければ感謝です。

●本論
Ⅰ．人から聞く証を通して
二人の弟子が「人から聞く」と言いましたが、それは、知らない人ではなく、彼らの尊敬する師、バプテスマのヨハネの証言の言葉を聞いたからでした。「見なさい」と。
　彼らにとって前日聞いたバプテスマのヨハネの証言はこうでした。
　　1:29-30　…「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。『わたしのあとに来るかたは、わたしよりもすぐれたかたである。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この人のことである。…」

そして今日、彼らは再びバプテスマのヨハネの証言を聞きます。

1:35 その翌日、ヨハネはまたふたりの弟子たちと一緒に立っていたが、
1:36 イエスが歩いておられるのに目をとめて言った、「見よ、神の小羊」。

この二人の関心を引くのには十分な言葉でした。

1:37 そのふたりの弟子は、ヨハネがそう言うのを聞いて、イエスについて行った。

ある人は、その結果ヨハネは弟子たちを失ったという表現をしますが、むしろ、「ヨハネは、その弟子たちを送り出した」といった方が良いのではと思っています。彼はのちにこう語ります。

ヨハネ3:30（新改訳）「あの方（イエス）は栄え、わたしは衰えねばならない。」

彼は、自分に使命と働きををお与えくださった、神さまのことばに生きていました。

:33「…わたしをおつかわしになったそのかたが、わたしに言われた、『ある人の上に、御霊が下ってとどまるのを見たら、その人こそは、御霊によってバプテスマを授けるかたである』。 わたしはそれを見たので、このかたこそ神の子であると、あかしをしたのである」。

バプテスマのヨハネは、今「見よ」「見なさい」言うことのできる救い主を目の前にして、心から感動しているありさまがわかります。

Ⅱ．イエスさまの招きを通して

さて、先ほど申し上げたようにバプテスマのヨハネが、送り出した形の二人の弟子たちでしたが、はたして彼らは、どんな思いをもっていたでしょうか。

バプテスマのヨハネから聞いた、その言葉によって強く動かされて、ヨハネの弟子をやめ、イエスさまの弟子となる決意をもってついて行った。　そう言われる方もいらっしゃいます。果たしてどうでしょうか。

そう言えば、他の福音書では、ペテロアンデレをはじめ弟子たちの印象的なイエスさまからの召しと献身決心のありさまが描かれています。

マタイ4:19　イエスは彼らに言われた、「わたしについてきなさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう」。すると、彼らはすぐ網を捨てて、イエスに従った。

とても印象的な、ペテロたちへの召命とその応答の記事ですが、まさに今日お読みし出会いが先にあったのだというところで、わかる気がします。

今日お読みしたこの記事の時点では、まだイエスさまに漠然とした興味をもって近づいていたのではないかと思われます。

1:38 イエスはふり向き、彼らがついてくるのを見て言われた、「何か願いがあるのか」。彼らは言った、「ラビ（訳して言えば、先生）どこにおとまりなのですか」。

イエスさまの問いかけに対して、他愛のない質問を返しています。それが、ここでの彼らのありのままでした。

ただどういう方か知りたいので…、まだどうしていいかわからないんだけど、バプテスマのヨハネがそう言ったから…その程度の理由と動機だとわかる答えです。

しかし、イエスさまにはそれで十分でした。イエスさまは彼らをこう招きます。

:39　…「きてごらんなさい。そうしたらわかるだろう」。

そこで彼らはついて行って、イエスの泊まっておられる所を見た。そして、その日はイエスのところに泊まった。時は午後四時ごろであった。

他愛のないイエスさまのこの招きの言葉とその応答から、彼らはイエスさまを知るように導かれていくのです。

ああ、そういえば私もそうだったな。そう気づかされることありませんか。

わたしも、ただ興味から聖書を読んでみた。教会に行って見た。他愛のない動機だった。なんかの熱意や決意があったわけではない。けれども、そんなわたしをもイエスさまの恵みが、わたしを信じる者としてくれたんだ…と。

まさに「きてごらんなさい。そうしたらわかるだろう」と言われるとおりです。

イエスさまと過ごす中で、その言葉を聞き、彼らはイエスさまが、救い主だという確信が深められたからです。　のちの使徒パウロはこう語ります。

ローマ10:17 したがって、信仰は聞くことによるのであり、聞くことはキリストの言葉から来るのである。

だれにもイエスさまを知るのに、信じるのに、はじめからわたしはクリスチャンでした。信じていました。従っていました…という人はいません。

むしろ恐る恐るかもしれない、そんなわたしたちをもイエスさまの招きと導きは覆って祝福してくださるのです。それがイエスさまはじまりの恵みの世界です。

Ⅲ．自分の確信を通して

1:40 ヨハネから聞いて、イエスについて行ったふたりのうちのひとりは、シモン・ペテロの兄弟アンデレであった。

1:41 彼はまず自分の兄弟シモンに出会って言った、「わたしたちはメシヤ（訳せば、キリスト）にいま出会った」。

ここでアンデレは、イエスさまと過ごしたのち、まず自分の兄弟に、自分が得た確信をそのまま伝えました。「わたしたちはメシヤ（訳せば、キリスト）にいま出会った」と。

アンデレの確信と感動が、兄弟に知らせずにはいられない、紹介せずにはいられないという行動となり、その行動がつぎのペテロの物語へとつながります。

1:42 そしてシモンをイエスのもとにつれてきた。イエスは彼に目をとめて言われた、「あなたはヨハネの子シモンである。あなたをケパ（訳せば、ペテロ）と呼ぶことにする」。

イエスさまを救い主だと知って、信じて、その感動を表していく時、それが次の人の物語に紡がれていくのです。それが証しというものだとよくわかる物語です。

そんな人々の感動が紡がれつながれてきた歴史の先で、今のわたしたちにつながり、この福音に触れ、教会に導かれて、今わたしたちの物語が紡がれているのです。
おそらくここにいる皆さんの多くが、言葉や状況は違え、やはり、今日聞いたような語り掛けを耳にしたのではないでしょうか？
「きてごらんなさい。そうしたらわかるだろう」。
「わたしたちはメシヤ（訳せば、キリスト）にいま出会った」。

終わりに）
昔の「めぐみのおとずれ」の記事取税人ザアカイの物語が取り上げられていました。
タイトルは「新しい人生」。そこには、孤独なザアカイの他愛のない動機、ただイエスさまを一目見たいという姿がありました。
そんな彼をイエスさまは知っていてくださり、声をかけられたのです。
「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日はぜひあなたの家に泊まりたい。」
そんな他愛のない出会い。でもそこでイエスさまと出会ったことで、彼の人生は大きく変わった。新しい人生が始まったというのが、その物語の語るところでした。
その記事の最後にこう記した有りました。
イエス様は私たちにも呼びかけて下さっています。イエス様は、私たちを新しく生まれ変わらせるために十字架にかかって下さいました。私たちがイエス様に近づき、呼びかけに応えるなら、私たちも喜びに満ち、生き生きとした、新しい人生をスタートさせることができるのです。
この春、あなたもイエス様と出逢い、新しい人生の第一歩を踏み出すことができますよう、心からお祈りしています。
「きょう、救いがこの家に来ました。…人の子（イエス・キリスト）は失われた人を捜して救うために来たのです。」　ルカの福音書　１９章９節
アンデレも、このザアカイも、そんな大した確信や決意があってイエスさまを見にきたわけではありませんでした。
それでもいいんです。イエスさまをのもとに行き、その言葉を聞き、イエスさまを経験していくとき、イエスさまがわたしたちに信仰と確信をくださいます。
イエスさまはじまりの恵みが覆う世界がそこにあります。
大切なことは「きて、ごらんなさい」という招きに、なんとなくでも応答して近づいていくことです。
そこから始まる、あなたの物語を神さまの側で用意してくださっています。